

野外体験系宿泊集中授業が 参加学生に及ぼす影響についての研究

— 2003年度Field Activity I —

齋藤一人 島田茂樹 伊崎純子 岩城淳子 都築 淳

1. はじめに

本学では、1998（平成10）年度より共通科目として「Field Activity I」という野外活動（キャンプ）の授業を開講している。この科目は、2つの問題意識から開設された（嶋崎・齋藤・島田，1999）。

第一は、現代の教育課題である「生きる力」を育成する方策の一つである「生活体験・自然体験の機会の増加」をねらったものである（中央教育審議会，1998）。通常大学で実施される科目は、各週授業の形式を採用するが、90分の授業内、かつ学内あるいは近辺での実習では断片的にならざるを得ず、その追求にはおのずと限界がある。

第二は、ここ数年確実に増加している気になる学生の姿である。例えば、「誰かがやってくれるという意識」や「横関係の緊張した繋がり」の存在である。そこには、自ら積極的に関わろうとしない率先性・主体性の欠如、他者依存的姿勢、緊張した友人関係、抑圧された自己主張の中で過剰に相手を意識する友人関係といった自己と他者との関係に関わる問題が潜んでいることが考えられる。

この2点を踏まえ、「Field Activity I」には、他科目の各週授業の形式とは異なり、学外の地で宿泊しながら授業を「野外体験系宿泊集中授業」形式で展開し、それを通して、学生が自らのことと身体を使い仲間と切磋琢磨する「体験」の機会を組織するという特色を持たせた。3泊4日というあ

る一定期間連続的に集中して行う宿泊形式による対人関係の深まりの中で、様々な「体験」を学生に提供し、「体験」を通して多様な「気付き」を与えることが学生の心身の成長に繋がると考え展開してきた。

具体的な「体験」を設定するための基本的な理念としては、特定の種目の技術習得やスキルアップに重点を置くのではなく、①自ら考え、自らの責任に基づいて、仲間と一緒に行動すること、②「困難」「挑戦」「課題解決」「達成感」「感動」の一連の流れを核にすることという2つの視点で「体験」を構成し、最終的には、集団生活を通して自己理解や他者理解等への学生の気付きを助長することをこの授業の課題とした。

開設からこの6年間、上記に基づいて展開されてきた授業が学生にどのような影響を与えているのかについて毎年振り返り、検討・考察し、「体験」プログラムに変化をもたせてきた(齋藤・嶋崎・島田・伊崎, 2001; 島田・齋藤・岩城, 2004; 島田・齋藤・嶋崎・伊崎, 2002; 島田・嶋崎・齋藤・伊崎, 2000; 嶋崎・島田・齋藤・伊崎, 2000)。このことは次年度以降の本授業のプログラム編成や宿泊集中自然体験活動系の同様の授業を組織するにあたり重要かつ必要なことである。

以上を踏まえ、本研究では、2003(平成15)年度に実施した「野外体験系宿泊集中授業」が参加学生に及ぼした影響について明らかにすることを目的とする。すなわち、2003年度の「Field Activity I」プログラムが、一定期間、自然の中で仲間と生活し、その中でこころとからだを存分に働かせる体験(自己理解、他者理解、課題解決能力、友情、連帯、役割、責任、感動、新しい技能の獲得)をすることという科目のねらいが実現できたのかを質問紙調査を用いて明らかにすることとする。

2. 2003年度Field Activity I の実施要領

期 日：平成15年7月31日～8月3日（3泊4日）。

場 所：とちぎ海浜自然の家（茨城県鹿島郡旭村）。

参加学生：111名、幼児教育科1年98名、2年9名、幼児教育科Ⅱ部1年4名。幼児教育科2年生は、学生リーダーとして参加した。なお幼児教育科1年のうち4名は事情によりField Activity Iの実習を欠席したので、実際の参加学生は107名であった。

スケジュール：第1日は、オリエンテーション、海岸実習、野外調理、講義、第2日は、救急救命法講習、地引網、野外調理、ナイトハイク、第3日は、ふれあい活動、テント設営、野外調理、漁火ファイア、第4日は着衣泳であった（詳しいタイムテーブルは表1を参照）。

表1 平成15年度 Field Activity I タイムテーブル

7月31日(木)		8月1日(金)		8月2日(土)		8月3日(日)	
8:00	集合 出発	7:00	起床 朝食 9:00 救急救命法実習	7:00	起床 朝食 9:00 ふれあい活動 講師：都築 淳先生	7:00	起床 朝食 8:30 テント撤収
12:00	オリエンテーション 昼食	12:00	昼食	12:00	野外調理 大鍋カうどん	9:30	着衣泳
13:00	海岸実習 ・グループ分け ・ゲーム ・砂の造形	13:00	地引き網へ移動	14:30	テント設営	12:00	昼食
16:30	野外調理 塩作り ポークカレー	15:00	地引き網 野外調理 魚の塩焼き	16:00	自由時間 入浴	13:00	活動終了
19:00	講義（着衣泳）		自然の家へ移動	17:00	野外調理 牛肉バーベキュー	18:00	学校着
21:00	活動終了 （ロッジ泊）	21:00	入浴 活動終了 （ロッジ泊）	19:00	漁火ファイア		
				21:00	活動終了 （テント泊）		

3. 方法

1) 質問紙調査の対象

事前調査の調査対象は、白鷗大学女子短期大学部開設の共通科目Field Activity Iを受講し、事前指導に参加した学生111名（内訳：幼児教育科1年生98名、幼児教育科Ⅱ部1年生4名、幼児教育科2年生9名）である。

事後調査の調査対象は、事前調査対象者から欠席者（幼児教育科1年生4名）ならびに学生リーダー（幼児教育科2年生9名）を除いた98名（内訳：幼児教育科1年生94名、幼児教育科2部1年生4名）である。

2) 調査時期

事前調査は、平成14年7月に、大学で実施したField Activity I最終ガイダンス時にアンケートを配布、後日回収という形式で実施した。

事後調査は、平成14年8月のField Activity I実施直後、実習場所であるとちぎ海浜自然の家内でアンケート用紙を配布、その場で回収という形式で実施した。さらに、平成14年9月に、Field Activity Iに参加した感想の自由記述を提出させた。

3) 調査内容

事前調査、事後調査ともに記名式で行った。

事前調査のアンケートは3種類の質問紙で構成されている。

(1) Field Activity Iの活動に対する質問紙

- ①フェイスシート（学科、学年、学籍番号、氏名、宿泊を伴う自然体験活動の経験の有無、Field Activity Iへの参加経験の有無）
- ②Field Activity Iへの参加動機を尋ねる項目（8項目、5件法）
（例）新しい友達をつくりたいから、単位になるから
- ③Field Activity Iへの期待を尋ねる項目（13項目、5件法）
（例）今の友だちともっと仲良くなる、砂浜活動、塩作り
- ④Field Activity Iへの懸念を尋ねる項目（13項目、5件法）項目は③と同じ

(2) 行動特性および価値観に関する質問紙

- ①自己実現型行動特性尺度（6項目、3件法）（宗像、1996）

(例) 充実した体験を楽しむ、予定にないようなことをして楽しむ

②自己抑制型行動特性尺度 (10項目、3件法) (宗像, 1995)

(例) 自分の感情を抑えてしまう方である、人から気に入られたいと思う

③自己価値観尺度 (10項目、3件法) (宗像, 1995)

(例) だいたいにおいて自分に満足している、時々自分が全く役立たずだと感じる (逆転項目)

④他者価値観尺度 (5項目、3件法) (宗像, 1995)

(例) 人は誰もが本当はあたたかいものだと思う、人は結局自分のことしか考えていないと思う (逆転項目)

(3) 自己肯定意識尺度 (平石, 1990)

①對自己領域【自己受容4項目／自己実現的態度7項目／充実感8項目、全て5件法】

(例) 【自己受容】自分なりの個性を大切にしている

【自己実現的態度】自分の夢をかなえようと意欲に燃えている

【充実感】生活がすごく楽しいと感じる

②対他者領域【自己閉鎖性・人間不信8項目／自己表明・対人的積極性7項目／被評価意識・対人緊張7項目】

(例) 【自己閉鎖性・人間不信】他人との間に壁をつくっている

【自己表明・対人的積極性】自主的に友人に話しかけていく

【被評価意識・対人緊張】人に対して自分のイメージを悪くしないかと恐れている

事後調査のアンケートも3種類の質問紙で構成されている。

(4) Field Activity I の活動に対する質問紙

①フェイスシート (学科、学年、氏名)

②Field Activity I に対する満足度 (13項目、5件法) 項目は事前調査(1) -

③「期待」と同じ

(5) 行動特性および価値観に関する質問紙：事前調査(2)と同じ

(6) 自己肯定意識尺度：事前調査(3)と同じ

(7) 感想（自由記述によるレポート）

4. 結果

まず、各調査で得たデータの分布について概観し、その後で事前調査と事後調査を比較する。それにより、Field Activity I の前後で学生の意識の変容を図ることができたのか、すなわち「自然の中で仲間と生活し、その中でこころとからだを存分に働かせる体験（自己理解、他者理解、課題解決能力、友情、連帯、役割、責任、感動、新しい技能の獲得）をすること」という科目のねらいが実現できたのかを明らかにする。

1) 事前調査の結果

①フェイスシート

Field Activity I の事前指導に参加した学生は、幼児教育科1年生98名、幼児教育科II部1年生4名、幼児教育科2年生9名であった。この計111名を対象に調査を実施し、各々の結果は欠損値を除き算出された。

まず、テント宿泊に限らず宿泊を伴う自然体験活動の経験の有無を尋ねた結果、経験者89名（87.3%）、未経験者13名（12.7%）であった。

②Field Activity I への参加動機（8項目、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法）

Field Activity I への参加動機を尋ねた結果は表2の通りである。実際の質問は8項目あったが、表に掲載しなかった項目のうち1項目は「内容が楽しそうだから」という項目の下位項目「どんな内容ですか、具体的に書いて下さい」と記述を求めるものであり、もう1項目は「以前参加して楽しかったから」という1年生以外の参加を予定しての項目である。今回は、量的なデータの分析を中心とし、参加者の多くが1年生であったことから上述の2項目は検討から除外した。

表2より、平均値4以上で、参加動機として強く自覚されていた項目は「今の友達ともっと仲良くなりたいから（ $M=4.33$ 、 $SD=0.76$ ）」「新しい友達

をつくりたいから (M=4.13, SD=0.87)」「内容が楽しそうだから (M=4.19, SD=0.83)」であった。

表2 Field Activity I への参加動機

質問項目	M	SD
新しい友達をつくりたいから	4.13	0.87
今の友達ともっと仲良くなりたいから	4.33	0.76
先生と仲良くなりたいから	3.26	1.05
自分のことを考えたいから	3.12	1.06
単位になるから	3.56	0.97
内容が楽しそうだから	4.19	0.83

n=104

③Field Activity I への期待 (13項目、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法)

Field Activity I への期待は、表3の通り総じて高くばらつきも少なかった。最も低い平均値で「自分のことを考える」(M=3.42, SD=1.15)で、ばらつきが最大であったものは「着衣泳」(M=3.51, SD=1.18)であった。

④Field Activity I への懸念 (13項目、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法)

Field Activity I に参加するにあたって気がかりなことを尋ねた結果は、表4の通りである。どちらといえば気がかりと判断された平均値3以上の項目は「新しい友達をつくれるか」(M=3.80, SD=1.07)、「着衣泳」(M=3.45, SD=1.11)、「救急法の講習」(M=3.40, SD=1.14)、「テントでの宿泊」(M=3.28, SD=1.13)、「地引き綱」(M=3.03, SD=1.14)であった。

2) 事後調査の結果

①Field Activity I に参加しての満足度 (13項目、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法)

Field Activity I 経験後の満足度については、表3の通りである。「着衣

表3 Field Activity への事前調査における期待と事後調査における満足度

質問項目	事前調査		事後調査		t値
	M	SD	M	SD	
新しい友達をつくる	4.29	0.82	4.53	0.72	-2.13 *
今の友達ともっと仲良くなる	4.62	0.66	4.60	0.71	0.20
先生と仲良くなる	3.74	1.00	4.07	0.77	-2.28 *
自分のことを考える	3.42	1.15	4.06	0.84	-4.10 ***
海浜活動	4.05	0.86	4.33	0.76	-2.39 *
塩作り	3.73	0.92	4.01	1.07	-1.80
救急法の講習	3.89	1.05	4.40	0.75	-3.94 **
地引き網	3.94	1.01	4.32	0.81	-3.00 **
ふれあい活動	4.25	0.87	4.95	0.26	-7.42 ***
漁火ファイア	4.31	0.86	4.95	0.22	-7.31 ***
着衣泳	3.51	1.18	3.70	1.17	-0.88
テントでの宿泊	3.93	1.10	3.67	1.00	1.90
野外調理	4.32	0.87	4.59	0.59	-2.48 *

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 n=98

表4 Field Activity への参加に対する懸念

質問項目	M	SD
新しい友達をつくりれるか	3.80	1.07
今の友達と仲良くなれるか	2.72	1.25
先生と仲良くなれるか	2.99	1.01
自分のことを考えることができるか	2.85	1.06
海浜活動	2.57	1.05
塩作り	2.55	1.14
救急法の講習	3.40	1.14
地引き網	3.03	1.14
ふれあい活動	2.96	1.13
漁火ファイア	2.62	0.99
着衣泳	3.45	1.11
テントでの宿泊	3.28	1.13
野外調理	2.95	1.20

n=102

泳」(M=3.70、SD=1.17)、「テントでの宿泊」(M=3.67、SD=1.00)の2項目を除き、残り11項目全てが平均4以上となった。特に「ふれあい活動」(M=4.95、SD=0.26)、「漁火ファイア」(M=4.95、SD=0.22)は、平均値がいずれも4.95と非常に高い満足度を示した。

②自由記述

自由記述で多くみられた記述を内容別に項目だてると、以下の通りである。すなわち、(ア)活動について、(イ)対人関係について(グループ内の人間関係)、(ウ)対人関係について(その場にはいない友人、恋人、家族との関係)、(エ)食事について、(オ)全体を通して学んだこと、(カ)自分の中で変化したこと、(キ)変化が起きた理由、(ク)参加を決めた理由、(ケ)参加を後悔したことや強く不安を感じたこと、(コ)印象に残った言葉、(サ)感動したこと、(シ)反省とこれからの課題、(ス)目標あるいは理想としてのリーダーや教師の姿、(セ)謝辞である。

これらの具体的な記述については齋藤ほか(齋藤・島田・岩城, 2004)に譲るが、それらを概観すると、参加の動機として、質問紙にない「今までにない経験をしたい」「先輩のすすめ」「自分にとってのチャレンジ(今までの自分を変えたい、新しい自分を発見したい)」という内容がみとめられた。また、参加への懸念として、同じく「体力がもつか」という内容がみとめられた。

3) 事前調査と事後調査の比較

①Field Activity Iへの期待と満足度

事前調査で尋ねた「Field Activity Iへの期待」の項目と、事後調査で尋ねた「Field Activity Iの満足度」は、表3の通り、同じ項目を用いている。Field Activity Iを経験することで期待された項目と満足度との間にどのような違いが生じたのかを調べるためt検定を用いて平均値を比較した。その結果、有意差が認められた項目は、「自分のことを考える」($t=-4.10$, $p<.001$)、「ふれあい活動」($t=-7.42$, $p<.001$)、「漁火ファイア」($t=-7.31$, $p<.001$)、「救急法の講習」($t=-3.94$, $p<.01$)、「地引き網」($t=-3.00$, $p<.01$)、

「新しい友達をつくる」($t=-2.13, p<.05$)、「先生と仲良くなる」($t=-2.28, p<.05$)、「海浜活動」($t=-2.39, p<.05$)、「野外調理」($t=-2.48, p<.05$)の9項目で、いずれも満足度が期待を上回る結果となった。

②自己実現型行動特性尺度(6項目、「いつもそうである(いつもしている)」から「そうではない(全くしていない)」までの3件法)(宗像, 1996)、自己抑制型行動特性尺度(10項目、「いつもそうである」から「そうではない」までの3件法)(宗像, 1995)、自己価値観尺度(10項目、「大いにそう思う」から「そう思わない」までの3件法)(宗像, 1995)、他者価値観尺度(5項目、「大いにそう思う」から「そう思わない」までの3件法)(宗像, 1995)

標記4尺度を用いた行動特性と価値観尺度におけるField Activity Iの影響を調べるため、t検定を用いて事前調査と事後調査における平均値を比較した。その結果は表5の通りである。全ての尺度で、統計的に有意な変化が認められたが、なかでも自己価値観尺度($t=4.13, p<.001$)と他者価値観尺度($t=-4.96, p<.001$)において顕著であった。参加した学生は、Field

表5 事前事後調査から見た行動特性の変化

	事前調査 M(SD)	事後調査 M(SD)	平均値 t値
自己実現型行動特性 min=0, max=6	1.63 (1.27)	2.11 (1.74)	0.53 -2.14*
自己抑制型行動特性 min=0, max=20	10.89 (2.77)	9.54 (2.38)	-1.30 3.13**
自己価値観 min=0, max=10	5.53 (2.17)	4.17 (2.11)	-1.31 4.13***
他者価値観 min=0, max=5	2.00 (1.36)	3.08 (1.50)	-1.05 -4.96***

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Activity Iを経験することで、経験する前よりも低く自己評価を見積もるようになり、その一方で、他者評価が肯定的なものへ変化したことが明らかとなった。

③自己肯定意識尺度（平石，1990）（41項目、「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法）

自己肯定意識に対するField Activity Iの影響を調べるため、t検定を用いて事前調査と事後調査における平均値を比較した。その結果は、表6の通りである。対自己領域では、自己受容 ($t=-2.34, p<.05$)、自己実現的態度 ($t=-2.89, p<.01$)、充実感 ($t=-6.75, p<.001$) の3つの下位尺度ともに統計的に有意な差が認められた。即ち、どの尺度においても自己肯定感がプラスに変化した。対他者領域では、自己表明・対人的積極性 ($t=-2.17, p<.05$) においてのみ統計的な有意差が認められた。

表6 事前事後調査から見た自己肯定性尺度の変化

		事前調査		事後調査		平均値	t値
		M	(SD)	M	(SD)		
対自己領域	自己受容	15.38	(2.69)	16.30	(2.87)	-0.95	-2.34*
	自己実現的態度	26.32	(4.92)	28.29	(5.09)	-1.99	-2.89**
	充実感	27.57	(6.11)	32.85	(5.36)	-5.50	-6.75***
対他者領域	自己閉鎖性・人間不信	16.23	(6.23)	15.20	(5.78)	1.14	1.31
	自己表明・対人的積極性	22.61	(4.95)	24.32	(5.22)	-1.67	-2.17*
	被評価意識・対人緊張	15.96	(5.41)	17.57	(5.85)	-1.56	-1.88

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

5. 考察

2003（平成15）年度のField Activity Iに参加した学生は、結果に示されたように、高い期待を持って活動に参加し、仲間と協力して行う活動を通じて人間関係を深め、仲間と関わる中で自分自身のことを深く考えるようになり、自分自身についても他者についてもより肯定的に認めるようになり、活

動終了時には高い満足感を示した。すなわち学生は、Field Activity Iに参加して、自然の中で仲間と生活し、その中でこころとからだを存分に働かせる体験（自己理解、他者理解、課題解決能力、友情、連帯、役割、責任、感動、新しい技能の獲得）をするという科目のねらいが実現できたと言えるであろう。

ここでは、活動内容と学生の自分自身と他者に対する意識の変化について考察することにする。

Field Activity Iの活動について、参加動機で「内容が楽しそう」が高い割合であり、活動内容それぞれに対する期待も総じて高かった。これは、年度当初に実施されるガイダンス時に、活動の説明と昨年度のField Activity Iのビデオを放映し、さらに事前指導において実施される活動について情報提供をしていることが、学生の参加動機や期待に関係していると思われる。ガイダンスや事前指導において、Field Activity Iは授業でありオリエンテーションのような楽しい活動ではないこと、スケジュールは非常に密であり遊び気分では参加できないこと、活動はグループで行うがそのグループは仲良しの友達と一緒にいるとは限らないこと、集団で行う活動でありルールや時間は厳守であることなど、注意すべき事項を学生に伝えてきた。そのような注意は与えていても、何となく楽しそうだから、友達が行くからといった甘い考えの学生がいるのも事実である。

活動に対する満足度は、テント宿泊を除いて全て増加した。友達と仲良くなることは事前の期待は高かったが、事後調査ではそれほど満足度は増加しておらず、それぞれの活動の方が満足度で伸びが大きかった。これは学生達がそれぞれの活動に積極的に取り組んだ結果と言えるであろう。テント宿泊は期待よりも満足度が減少した。テント宿泊は、エアコンもなく、寝心地も決してよいものではないが、それを学生達が素直に反応したのであろう。これは実際に体験してみないとわからないという事例であろう。

救急救命法の講習も満足度の上昇が大きい。学生の中には自動車運転免許を所持しているか自動車教習所に通っている者も多い。自動車教習所では救

急救命法の講習を受けているが、野外活動を体験することで救急救命法の意義を再確認したものと思われる。さらに、講習は消防署の救急救命士によって行われ、講習の修了試験があり、それに合格すると講習修了証がもらえることも満足度の高い理由かもしれない。

自分自身と他者に対する意識の変化は、おおむね肯定的な方向に変化した。行動特性の質問紙で自己抑制型行動特性の得点が減少した。これは、自分を抑えて周りに合わせるのではなく、より自分らしさを出そうとする意識が高くなったことを意味する。また自己価値観の得点も減少した。これは自分を低く見積もるようになったというよりは、自分自身を過大評価せず現実的に捉えるようになったと考えるほうがよいであろう。他者価値観がプラスに変化したことから、他者のあたたかさや、他者と気持ちが通じあうことを感じていることがうかがわれる。

自己肯定性の質問紙では、対自己領域で有意な変化が認められた。充実感の項目の大きな変化は、活動への高い満足度と一致している。自己実現的態度の肯定的変化も、行動特性の質問紙での変化と一致している。参加学生は、Field Activity I を経験して、前向きに、やる気を持って取り組んだり、目標を持って行動するという意識が高まったといえる。

2003年度Field Activity I は、短期大学部で実施された実質的に最後の授業であった。開設年度には17名の参加者であったのが、毎年参加者が増加し、この数年は60名から70名と、幼児教育科のほぼ半数が参加するようになってきた。そして2003年度には107名、うち1年生は98名と、幼児教育科のおよそ8割が参加する規模になった。幼児教育科Ⅱ部の学生は年によって参加人数に大きな差があるが、幼児教育科の学生は、ほぼコンスタントに増加してきた。

最初の数年間は、事前の活動内容やスケジュールの決定、そして活動の実施と運営に大きなエネルギーを費やしていたが、毎年、参加学生への質問紙調査を実施するなど活動の振り返りを行うことを積み重ねてきた。そうしてここ数年は行う活動の意義やねらいがはっきりしてきて、授業担当教員のね

らいや目的を明確にしたプログラムを作成できるようになってきた。そのようなことから本年のように100名を超える参加学生に対しても、一定の影響を与えられるプログラムが作成できたと考えられる。

しかし、授業において常に意識しなければならないのは活動や担当者の意識のマンネリ化である。ある程度実施する活動が安定してくると、新しい活動を考案しなくなったり、実施中の危機管理の意識が薄くなったりする危険が生じる。そのようなことのないよう、毎年振り返りを行い、その結果の一部は冊子にまとめたり、関連学会で発表するなどしてきた。

授業の実施に当たっては、担当教員だけではとうていすべてを行うことはできなかった。本年度は、幼児教育科2年生が学生リーダーとして参加し、グループ活動を引っ張ったり、グループをまとめたり、活動の準備や後片づけを引き受けたり、漁火ファイアの企画と進行を行ったりと、表に裏に積極的に動いてくれた。彼女たちの献身的な貢献があったからこそ、参加学生のこうした意識の変化が生じたといえるだろう。

この度の女子短期大学の改組により、幼児教育科と幼児教育科Ⅱ部は発達科学部発達科学科に転換改組となった。それにともない女子短期大学部で行われていたField Activity Iは発展的に解消することとなった。Field Activity Iの6年間にわたる活動をまとめ、その成果を新学部の授業「野外運動」へと引き継ぐことが必要である。

6. 参考文献

- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の発達に関する研究（Ⅰ）－自己肯定性次元と自己安定性次元の検討 名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科, 37, 217－234.
- 宗像恒次 1996 最新行動科学からみた健康と病気 メヂカルフレンド社
- 宗像恒次 1995 ストレス解消学 小学館ライブラリー
- 齋藤一人・島田茂樹・岩城淳子 2004 2003年度Field Activity I報告書 白鷗大学女子短期大学部（未公刊）

- 齋藤一人・嶋崎博嗣・島田茂樹・伊崎純子 2001 野外体験系宿泊集中授業「Field Activity I」の実践報告(1)～2000年の実践と振り返り～ 全国保育士養成協議会第40回研究大会発表論文集(ロイトン札幌), 68-69.
- 島田茂樹・齋藤一人・岩城淳子 2004 野外体験系集中宿泊授業「Field Activity I」の実践報告(第4報) 全国保育士養成協議会第43回研究大会発表論文集(名古屋都市センター、全日空ホテルズホテルグランコートナゴヤ), 118-119.
- 島田茂樹・齋藤一人・嶋崎博嗣・伊崎純子 2002 野外体験系宿泊集中授業「Field Activity I」の実践報告(3) 全国保育士養成協議会第41回研究大会発表論文集(ホテル青森), 70-71.
- 島田茂樹・嶋崎博嗣・齋藤一人・伊崎純子 2000 野外体験系宿泊集中授業「Field Activity I」の実践報告(2)～参加学生の意識の変化に関する調査～ 全国保育士養成協議会第39回研究大会発表論文集(北九州八幡ロイヤルホテル), 96-97.
- 嶋崎博嗣・齋藤一人・島田茂樹 1999 新設科目「Field Activity」の実践報告 白鷗女子短大論集, 24(2), 307-336.
- 嶋崎博嗣・島田茂樹・齋藤一人・伊崎純子 2000 野外体験系宿泊集中授業「Field Activity I」の実践報告(1)～設立経緯と活動内容～ 全国保育士養成協議会第39回研究大会発表論文集(北九州八幡ロイヤルホテル), 94-95.
- 中央教育審議会 1998 新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機- (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/980601.htm)